

大門通り 界隈一束

続旧聞日本橋・その一

長谷川時雨

青空文庫

あたしの古郷ふるさとのおとめといえ、江戸の面影と、香かを、いくらか残した時代の、どこか歯ぎれのよさをとどめた、雨上りの、杜かきつばた若わかのような下町少女おとめで、初夏になると、なんとなく思出がなつかしい。

土つち一升、金かね一升の日本橋あたりで生れたものは、さぞ自然に恵まれまいと思われもしようが、全くあたしたちは生花きばなの一片ひとひらも愛した。現今いまのように、ふんだんに花の店がない時分だから、一枝の花の愛いとしみかたも格別だった。紅梅が咲けば折って前髪に挿し、お正月の松飾りの、小さい松ぼっくりさえ、松の葉にさして根がけにした。山吹の真白なじくも押出して、いちようがえしへかけた。五月の節句には菖蒲しょうぶの葉を前髪に結んだり、矢や羽根ぼねに切つたのを簪かんざしにさしたものだつた。

新蕪しんわらは、いきな女ひとの投島田なげしまだばかりに売れるのではなく、素人しろうとでも洗い髪を束ねたりしてよく売れた。燕つばめの飛ぶ小雨の日に、「新蕪、しんわら」と、はだしの男が臍すねに細かい泥を跳ねあげて、菅笠すががさか、手ぬぐいかぶりで、駄足で、青い早苗を一束にぎって、売り声を残していった。

水玉という草に水をうつて、涼しくかけたものだが、みんな一時いっときのもので、赤くひか

らびるまではかけていない。直しきにかけかえる手数はいとわなかつた。一たい、平日ふだんから油染じんだ髪をきらつていたから、菅糸すがいとだつて、葛引くずひきだつて、金紗きんしゃ（元結もつとい）な長さの、金元結の柔らかい、縒よりのよい細いようなのを、二、三十本揃えたもの。芝居けいせの傾かたむ城いの鬘かつらにかけてあるのと同じ）だつて、プツンと断きつて、一ぺんかけたただけだつた。

深窓しんそな育ちでも、どこか女伊達だてめいた気風をもつて、おそろしく仁義礼智の教えを守つて——姿の薄化粧のように、魂も洗おうとした。この二行ばかりの文章は、文飾のようにもとられようが、濃かれ薄かれ、そんな気持ちはたしかにあつたのだ。人と、その性質は別としても、その地方色としては——

古い日記をくりかえして見ると、父が話してくれたことが書いてあるので、此処ここへ抜いて見よう。

——父の晩酌おひのとき、甥まきぼうの仁坊まきぼうのおまつりの半纏はんてんのことから、山王様さんのおさまのお祭りのはなしが出る。仁まさしの両親とも日本橋生れで、亡なくなつた母親は山王様の氏子うじこ、此家こちらは神田の明神様の氏子、どっちにしても御祭礼おまつりには巾はばのきく氏子だというと、魚河岸から両国きわの際きわまでは山王様の氏子だつたのが、御維新後に、日本橋の川からこつちだけが、神田明神の

氏子になったのだと、老父が教えてくれた。

あたしたちは神田明神へお宮参りをしましたが、お父さんは山王様へお宮参りにいったのですかときくと、そうだといわれる。

それからそれへと古いはなしが出る。以下は老父の昔語り――

玄治店げんやだなにいた国芳くによしが、豊国とよくにと合作で、大黒と恵比寿えびすが角力すもうをとっているところを書いてくれたが、六歳か七歳むっつ ななつだったので、何時いつの間になくなってしまった。画会ひろしげなぞに、広重ひろしげも来たのを覚えている。二朱にしゆもってゆくと酒と飯が出たものだった。

国芳くによしの家は、間口が二間、奥行五間ぐらいのせまい家で、五間の奥行のうち、前の方がすこしばかり庭になっていた。外から見えるところへ、弟子が机にむかっている、国芳は表面に坐っているのが癖だった。豊国の次ぐらいな人だったけれど、そんな暮しかただった。その時分四十位のちゆうがら中柄ちゆうがらの男で勢いの好い、職人はだで、平日しじゆうどてらを着ていた。おかみさんが、弟子のそばで裁縫しやくをしていたものだ。武者絵むしやえの元祖もとすけといつてもいい人で、よく両国の万八まんぱち――亀清楼かめせいのあるところ――に画会があると、連れていってくれたものだ。

国芳の家の二、三軒さきに、鳥居清満とりいきよみつが住んでいた。

大坂町の雷師匠は、冬でも表を明つぱなし、こまよせから、わざと見えるようにしてある。上り口の板敷のところ、いけない児童を空俵に入れたり、火のついた線香をもたせたりして、自分の傍には弓の折をひきよせておいて、がみがみ大声で唼鳴りちらしている。空俵へ入れるのは、これから河へ流してしまうというのだ。他のおとなしい児童がふるえながら詫すると、それをしおに俵から出してやる。見えすいた広告法だが、厳しい師匠にやらなければ、いけないと思つている、無学町人の親たちには、それが大層評判がよかつた。

国芳の家のそばにも手習師匠があつた。私が七歳であつたころに、四十位な年配で、小笠原の浪人加賀美暁之助という人だつた。この人のほうは立派な人物で、大橋流の書も佳いし、絵は木挽町の狩野の高弟で、一僊といつて、本丸炎上の時は、將軍の居間の画を描いたりしたほど出来たし、漢学も出来る、手をとつて教えてもらった。撃剣もおしえた。色は黒かつたが人品の好い人で、御家内も武家の出だから品のある女だつた。

三馬に逢つたことがある。そうさ、五十四、五に見えた。猿のしるしのある家で、化粧水を売つていたつけ。倉の二階住で、じんきよやみのくせに妾があつた。子供心にも、い

やな爺じいだと思つたよ。

歌川輝国うたがわてるくには、宅うちのすぐ前にいたのさ。うまや新道——油町と小伝馬町の両方の裏通り、馬屋新道とは、小伝馬町の牢屋ろうやから、引廻しの出るときの御用を勤めるといふ、特別の役をもっている荷馬の宿があつたから——の小伝馬町側に住んでいた。くき双紙そうしの、合ご巻まかきでは、江戸で第一の人だつたけれど、貧乏も貧乏で、しまいは肺病で死んだ。やつぱり七歳ななつぐらいから絵をおしえてくれた。その時分三十五、六だつたらう。豊国の弟子だつたから、豊国の描いたものや、古い絵だの古本だの沢山あつた。種彦たねひこがよこした下絵の草稿もどつきりあつた。私は二六時中しじゅう見みていても子供だからそんなに大切にしなかつたし、おかみさんのおもよというのは、竈河岸へつがいがしの竈屋の娘で、おしやべりでしようのなかつた女だから、輝国が死んでから、そういうものはどうなつてしまつたかわからなかつた。

住居すまいは入口が格子で、すこしばかり土間があつて、二間に台所だけ、家賃は（今の金で）三十銭位だとおぼえている。それでもお酒は大好きで、たべもののはてんやものばかりとつていた。貧乏でもそういうところは驕おごつていた。芝の泉市せんいちだの、若狭屋わかさやだのという絵双紙屋から頼みにきても、容易なこつては描いてやらなかつた。その時分、定さんという人

がよく傭やとわれてきたものだ。輝国が絵——人物や背景を描くと、その人は、軒だとか窓だとか、縁側だとか、襖ふすまとかいったものの、模様や線をひきにくる。腕はその当時いい男だといわれていたのに、弁当も自分持ちで、定じょうぎ木も筆も持参で来て、ひどい机ばかりで仕事をして、それで一日がたつた天保銭一枚（当時の百文・明治廿年代まで八厘）。今の人がきくと嘘うそのようだろう。

寿鶴亭じゅかくていという八人芸（時雨云、拙著『旧聞日本橋』の中には、この寿鶴の名が思いだせないで〇〇齋さいと書いたのと同じ人）の上手なのがすぐ近所にいた。娘に、油町の辻新つじしんという大店おおだなの権助ごんすけを養子にして春米屋つきこめやをさせ、自分たちは二階住居だまをしていた。賑おおぜいやかな人で、自分の家の二階で八人芸をやっていると、まったく瞞だまされるほど、大勢寄おおぜいよつているようにきこえた。かみさんは新宿あたりの上りものあが（遊女の）で、強者したたかものだった。孫娘のおつるといふのを手塩にかけて育てていたが、それが後に妾めかけにいつて大層出世をしたとかきいた。たしか、大鳥圭介おおとりけいすけさんのところへだときいた。

辻新つじしんといえ、あすこの家の頭うちかしら——出入りの鳶とび職しよく——が、芝金しばきんの直弟子じきでしで、哥うたぎ沢わの名とりだった。めっかちの、その男のつくつたのが「水の音」という唄だ。自分の名なの音がよみこんである——

今日はこの位にしておこうといって、父上は枕まくらにつかれる。こういう事は、いつもきき流しにしてしまつて、あとで記録しておけばよかつたと、いつも後悔するから、今夜こそ書いておこう。

と止めてある。父は天保十三年の生れ、七歳ななつの時といえは嘉永元年だ。外国船がしきりに渡来して、世の中は刻々にむずかしくなつていたころだと思う。

青空文庫情報

底本：「旧聞日本橋」岩波文庫、岩波書店

1983（昭和58）年8月16日第1刷発行

2000（平成12）年8月17日第6刷発行

底本の親本：「桃」中央公論社

1939（昭和14）年刊行

入力：門田裕志

校正：松永正敏

2003年7月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

大門通り界限一束

続旧聞日本橋・その一

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 長谷川時雨

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>